

肝硬変 傷んだ細胞再生

長崎大など 2年後臨床研究へ

ブタで実験着手

重い肝硬変患者の肝細胞を若返らせる再生治療の実用化に向け、長崎大と東京医科大などのチームが今春、人と臓器のサイズが近いブタを使った実験に乗り出した。傷んだ肝細胞が正常な細胞に置き換わることで、肝機能の回復が見込まれ、肝移植でしか救えなかった重症患者の新たな治療の選択肢として期待される。2025年度にも臨床研究を始める。

肝臓の炎症が慢性化すれば、組織が硬くなって機能しなくなる「線維化」が進み、肝硬変に至る。近年、あまり飲酒しない人が発症する「非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）」から肝硬変になるケースが増えている。関連学会によると国内の肝硬変の患者は推計で30万人以上になる。

国立がん研究センターは17年、細胞の増殖や変化に関わる3種類の化合物を傷んだ肝細胞に加えれば、カテーテルで肝臓に通じる血管に注入する。増殖能力が高い「肝前駆細胞」と呼ばれる若い細胞に変わり、肝臓を再生できると報告。若返らせた細胞を「CLiP」と名付けた。

チームはこの技術を応用。まず、肝硬変のマウスなどに人の肝細胞から作ったCLiPを投与したところ、肝臓に定着後、線維化した組織が溶けて正常な肝細胞に置き換わった。ほとんどが肝臓で作られることから肝機能の指標となるたんぱく質「アルブミン」の産生も確認できた。

今年4月にはブタを使った実験に着手。肝臓の組織片からCLiPを作って体内に戻す実験を重ね、有効性と安全性を確かめる。結果を踏まえ、早ければ25年度に重症患者3人程度を対



肝硬変の再生治療のイメージ

腹腔鏡手術で肝臓の組織を採取する

3種類の化合物で若返らせ、増やす

カテーテルで肝臓に通じる血管に注入する

象に臨床研究を始める。計画では、腹腔鏡で採取した患部の組織片からCLiPを作製。培養して1億個まで増やし、カテーテル（医療用の細い管）で肝臓に通じる血管に注入する。研究代表者の長崎大移植

消化器外科の江口晋教授が確認されれば画期的な治療法となり得る。ただ、肝臓の採取にはリスクが伴い、CLiPの作製に「ストモカ」があるので、治療対象は慎重に決める必要がある」

木村公則・都立駒込病院

就職内定すでに7割超

来春卒業 採用選考が解禁

2024年春卒業予定の大学生らの採用選考が1日、解禁された。人手不足を

背景に、学生優位の売り手市場となっており、就職内定率はすでに7割を超えている。採用を巡るルールの形骸化も指摘されている。

同社では、海外や離れた地域の学生が参加しやすく、企業側も会場や対応する人員の効率化を図れるとして、最終面接までオンラインで行う。

パナソニックホールディングスは大阪市中央区の拠点で、オンラインでの面接を始めた。面接官がパソコンの画面越しに「チームで協力体制を構築する際の苦労は」などと質問し、学生

就職情報会社のリクルートによると、来春卒業予定の大学生の就職内定率は5月15日時点で、前年同期より6.7ポイント高い72.1%だった。スケジュールを前倒しする企業も多く、早期内定が加速している。



オンラインで採用面接を行うパナソニックホールディングスの担当者1日、大阪市中央区で

も検討している。昨年の小中高生の自殺者は計514人で初めて5000人を超え、（1000）人

殺 オンライン 診断 早期に察知

県では、これまでに対応した34人の中高生に自殺者は出ていないという。政